（別紙２）

論文審査の結果の要旨

氏　名　　山根　龍一（やまね　りょういち）

本論文は、１９３０年代から４０年代の坂口安吾の代表作を取り上げ、マルクス主義受容に内在していた観念性、天皇制国家への帰属意識、戦争をめぐる決定論的な歴史観など、戦前、戦後の日本を支配していた強固な思想的枠組みに対し、安吾が闊達な言語的実践によってその解体を企てていった様相を明らかにしたものである。

構成は七章からなる。第一章、第二章、第三章では、初期の小説である『木枯の酒倉から』『風博士』『黒谷村』の三篇が取り上げられている。『木枯の酒倉から』においては、〈想像力〉と〈幻術〉の複合によって、西洋的な理性中心主義が解体されていく様相が論じられている。安吾の東洋哲学体験、参照した文学概説書の影響関係などから独自の文学観が構築されていく過程を解き明かしたくだりは、安吾と仏教との関係を再評価する上で、重要な問題提起になっている。また、『風博士』においては、福本イズムと「成吉思汗論争」を背景に置くことによって、観念的なラディカリズムとナショナリズムとが容易に反転しうる関係にあることを批評的に明らかにしていく作用が指摘され、『黒谷村』においては、「禁欲のエートス」に苦しむ仏僧と、左傾したくてもできぬ豪農の次男との共通点が浮き彫りにされていく過程が分析されている。これらはいずれも、「転向文学」に表象される時代状況への内在的な批判として、傾聴に値する見解といえよう。

第四章と第五章は、戦中の評論『日本文化私観』と、小説『真珠』を扱っている。『日本文化私観』においては、〈僕〉にとって必要なものこそが文化であり伝統である、という言語実践のプロセスに、オリエンタリズムとナショナリズムを超克していく可能性が指摘されている。また、『真珠』においては、「超人／常人」という区分を意図的に強調することによって、「軍神」を称揚するかにみえる当初の線引きが、次第に無効になっていく様態が指摘されている。

第六章と第七章は戦後の評論『堕落論』と小説『いずこへ』を扱っている。『堕落論』においては、個人を超えた〈歴史〉と、人間主体との可塑的な応答関係を編み出すための方法として「堕落」という概念が持ち出される必然が解明され、また、『いずこへ』においては、独我論的陥穽に陥っていた戦後の主体性論議に対し、作中の不定型な〈私〉のありようが、批評的な意味を持ちえていた事実が明らかにされている。

安吾の全創作活動を検討対象とするにはなお論じるべき作品が残されているが、異なる思想を拮抗状態として受け入れ、その中であらゆるイズムに潜む観念の虚偽を暴いていく、安吾独自の言語戦略を明らかにしえた点は高く評価される。

以上の点から本審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位に値するとの結論に達した。